

GOING TACTICAL

STEVEN M. GREER MD

Copyright 2004 Steven M. Greer

その場限りの対処方策

スティーブン・M・グリア 医師

著作権 2004年 スティーブン・M・グリア

([公開プロジェクトのウェブサイトより](#))

テロリズムという癌が世界中に転移しているこの時に、我々は足を止め、どうして我々がこの状態に立ち至ったか - そして、どうしたら我々は問題を解決できるか - を分析してみるのがよいだろう。

現在、この問題の根本に実際に取り組み、少しでも意味のある解決策を示している世界の指導者は、誰もいない。今まで米国と国際社会は、深刻さを増す困難で予測可能な問題に対し、まったくその場限りの（戦術的）対応をしてきた。

とりわけテロリズムの、一般にはゲリラ活動の非対称性により、戦術的な解決策がその目的を達成することは決してない。米国とその同盟者による進行中のテロとの戦い、およびその他の行動は、問題を解決するための一つの効果的戦略であると言われている。しかし実際には、それは放置されたままになっているより大きくより根本的な問題に対する、短期の戦術的対応にすぎない。

戦術的行動が無価値だと言っているのでも、常に間違いだと言っているのでもない。そうではなく、その種の行動を、根底にある問題を正すための意味のある戦略的分析、およびそれに付随する戦略的計画と混同してはならないということである。

テロリズム、宗教的狂信、殺人行為、等々に対するまっとうな防御などあり得ないが、それでも我々は、なぜ問題が存在するのかをありのままに考察する必要がある。

これやあれやの‘イズム’のために暴力の種をまき散らそうと身構えている宗教的狂信、闘争、殺人狂は、常に存在してきた。しかし、現在の世界 - ‘欧米なるもの (western)’ のすべてに向けられたテロリズムの蔓延は、主流メディアと世界の政治指導者たちから現在では殆ど無視されている、一つの歴史により増幅されたものだ。

すなわち：**欧米** (The West) は世界の多くの地域、それも特に石油豊富な中東に、長居をしすぎてきた。こう述べたからといって、それを孤立主義と混同してはならない。むしろそれは支配的な、時には好戦的な駐留だったことを指摘している。次のことを思い出す必要がある。つまり、オサマ・ビン・ラディンその他は、実際にはアフガニスタンへの

ソビエト侵攻に対抗する‘自由の戦士’を代理支援する、米国の同盟者だったということである。あのサダムは、イラン人質危機の後、我々の同盟者だった。そして、あの地域とその他の場所の多くの独裁者の富、権力、能力は、ただ一つのものにより支えられてきた：**石油**（Oil）である。

数十年間にわたり、米国の戦略上の国益は（冷戦を別にして）、安い石油の安定した着実な増量供給を確保することに集中してきた。石油の富が、サダムの一団に大量破壊兵器を獲得する手段を与え、また中東地域に戦略問題の中心的役割を与えた。

サダム・フセインに対する第一次湾岸戦争は、サダムがクウェートの石油豊富な土地を欲しがったため - そして、我々が‘重要な国家安全保障上の利益’（石油と読む）であるクウェートとサウジアラビアを守ろうとしたために起きた。この地域における我々の長い駐留が民族主義者と宗教的狂信者たちを怒らせ、かつて我々の同盟者だったオサマは不倶戴天の敵になった。

これらすべての中にある現実の悲劇は、少なくとも 1950 年代以来 - おそらくはそのずっと以前から - 我々には石油も、石炭も、原子力も必要なかったということである。石油の代替物、および内燃機関の効率を著しく向上させる技術は、数十年間存在し続けてきた - ただ冷酷に抑圧されるだけのために。

石油がなかったなら、我々が中東で長期間の横柄な駐留を続けるつもりだったなどと、誰が本当に信じるか？（イスラエルは、関連するが別の状況であり、ここでの分析には全体として当てはまらない）

もしそうなら、なぜ我々は中央アフリカにも、南アメリカにも、他の多くの紛争地域にもいないのか？

他の多くの国家指導者たちと同様に、ブッシュ大統領は 2002 年の一般教書演説で、輸入石油からの独立は我々の国家安全保障の問題だと述べた。しかし、どうやって？ 全体的に、我々の依存度は増大しており、アラスカや米国の他の場所で地面にさらに幾つか穴を掘ったところで、その方程式には殆ど影響を与えないだろう。

議会を通過した最近の数十億ドルの“エネルギー法案”は、実際には大手石油企業のためのご機嫌取りだった。それはいかなる有意義な解決にも寄与せず、いろいろな意味で問題を悪化させる。

2003 年 2 月、米国がイラクに侵攻する直前に、ブッシュ家のある友人が私にこう語った。“... もちろん、これは実際には世界第二位の規模の油田を確保することに関係しています。誰もがそれを知っています” 初めは愕然としたが、私はこの紳士が次のように説明するのを聞いた。中国が（インドと共に）急速に工業化しているために、我々の戦略上の権益からイラクの油田を‘開放’し、その生産量を最大限に引き上げる必要があった。も

もちろん、サダムは酷い独裁者だった - だが、世界のあの地域には多くの酷い政権があり、人権侵害がはびこっている。しかし、サダム - 彼はイラクの油田を自由に利用し最大限に開発することを阻んでいた。それが許し難い罪だったのだ。

公開プロジェクト (www.DisclosureProject.org) が入手している証人たちは、重要な増えつつある多くの科学的証拠と共に、世界の化石燃料と原子力への依存は、人為的な計画であることを立証する。我々には他に選択の余地がないために新たな石油資源を探し続け、中東の石油に関連する死活的な欧米の権益を守らなければならない、というこの**大嘘** (Big Lie) は、暴かれて解消されなければならない。確かに、世界経済の数兆ドルの部分は今、不幸にも石油に依存 (中毒というべきか) している。しかし、これは大胆な指導力を欠く言い訳にはなり得ない。テロリズム、石油ファシズム、環境崩壊、地球温暖化、そして富める国と貧しい国との広がる格差。このような多面的な危機は、我々の石油依存、およびそれに関連する権力の行き過ぎと誤用にその根本がある。

いわゆるゼロポイント・エネルギーおよび量子真空エネルギーの分野における有望な進展は、より平凡な内燃機関効率の飛躍的向上と共に、数十年間無視されるか、能動的かつ冷酷に抑圧されてきた。 (www.SeasPower.com を見よ) 国民、メディア、環境団体、および国際社会は、これらの問題を緊急に調査し、これらの新エネルギー技術の完全な応用を実現するために、民間の取り組みを支援する断固たる手段を取らなければならない。

きわめて違法な秘密のグループが存在し、これらの技術を能動的に抑圧してきた - それは今日この時点まで続いている。現在我々と共に取り組んでいる複数の科学者たちは、これまで脅迫され、研究を妨害あるいは押収され、ほとんどの場合、脅されて身もすくむ沈黙へと追いやられてきた。我々が次々と石油戦争に突入する一方で、このようなことが行なわれているのだ。

軍、情報機関、研究室、企業、および協会組織と闇のつながりを持つ複合型の国家横断的組織 (なおかつ誰にも管理されていない) によるこの活動は、高度な機能を持つ組織犯罪集団のようであり、数十年間恐怖により支配してきた。実に**最大のテロ** (Big Terror) は、人々に知られず問題にもされていない。その一方で我々は、失敗した数十年に及ぶ石油依存政策の負の結末を追いかけ、世界中を走り回っている。

議会のメンバー、情報機関の高官、ペンタゴンの高官といった人々 (彼らの全員がこのようなグループの存在を確信している) と直接会ってきた私は、このグループが引き起こしている恐怖を直に目撃してきた。しかし、恐怖に負けて断固たる行動を拒む危険をおかすなら、それは我々に大きな代償を強いる文明の段階に我々は至った。

この状況を正すために我々が共同で行動しない限り、最近のテロリストたちによる攻撃など、将来に起きる出来事に比べたら懐かしい思い出になるだろう。ペンタゴンでさえ最近では、地球温暖化に関連した突然で破滅的な気候変動の可能性について警告している。それは地球を環境的、社会的、軍事的な混沌に陥らせる。この危機の解決策が、軍と企業の

不法な‘闇の’プロジェクト - 米国の納税者の税金により賄われ、塹壕に身を潜めて支配に没頭する泥棒政治により隠し通されている - にしまい込まれているというのに、我々はいかなる代償を払おうとも無為に傍観しているのだろうか？

実に、恐怖、貪欲、近視眼的な世界観と宇宙観に駆られたこのような思考は、人類文明を崩壊の瀬戸際に導いている。地球と生命を救うこれらの技術の抑圧は、あまりにも酷くあまりにも長期間行なわれてきた - その結果、これを行なっている輩は故意に惑星殺し (planetocide) - 惑星全体の死滅 - をしようとしている。

現時点で、宇宙エネルギー利用システムズ有限責任会社 (Space Energy Access Systems, Inc. ; SEAS) は、化石燃料を完全に置き換える技術を開発できる科学者たちを確認している。我々の予測では、12 箇月から 36 箇月以内に、このようなエネルギー発生システムの第一世代を、広範囲の応用に適った装置にすることが可能である。しかし、基礎研究と開発の資金に数百万ドルを要するこのような事業は、政府によっても金融界によっても支援されていない。なぜか？

訳者註記： SEAS は現在ない。2007 年 7 月に AERO, Inc. (先進エネルギー研究機関) が新たに設立された。

国民は、新エネルギー技術が急速に開発され広範囲に応用されるようにするために、我々のあらゆるレベルの議員たちがこれらの技術を真面目に調査し、環境マーシャル計画を始めよう要求しなければならない。

これまで、発明家たちは自らの資金で原理の証明を行なうシステムを生み出してきた。しかし、それらは今までのところ民間金融機関に支援されていない未熟な技術であり、政府の助成制度も反応してこなかった。国民はこのような事業を支援するつもりがあるだろうか？ - 政府と巨大金融界の腐敗と慣性を迂回して。我々は間もなくそれを知ることになるかもしれない。

しかし、これだけは確実である：方向を変えなければ向かっている所で終わりになる...

テロリズム、石油依存、地政学的緊張、環境破壊、地球温暖化に関連する絡み合った諸問題の重なりに対処する、本当の戦略に少しでも近づいた方策を示している国家や世界の指導者は、一人もいない。彼らは**その場限りの対処方策 (戦術) (GOING TACTICAL)** を行ない、これを戦略だと誤解している。それは戦略ではない。それは、断固たる戦略計画と行動に対する、ごまかしの下手な言い訳にすぎない。この行動は半世紀の間必要とされてきた。しかし、恐怖、貪欲、墮落、そして権力力学により、それは悲劇的にも引き延ばしにされてきた。今、我々はそのツケを払っている。

たとえ我々が、テロリストたちの増長を一時的に遅らすことに戦術的に成功したとしても、依然として我々には問題の核心が残される：石油への我々の切実な要求と多くの問題。

石油、石炭、およびガスに基盤を置くエネルギー供給のゼロサムゲームは、否応なしに格差を生じさせ、それは世界人口の少なくとも三分の二に終わりのない貧困を強いる。このつぼの中で、無数の生き地獄が生まれるだろう。そして、それは 9/11 に対する戦術的対応、イラクへの侵攻、あるいは、賞賛されるかもしれないとはいえ、中東での民主主義の確立によってさえも、少しも改善されないだろう。厳しい現実には、我々の文明が最終軌道上にあるということである。我々は、墜落するか将来に無事たどり着くかの歴史の交差点にいる。本当の指導力が求められており、これらの新しい技術に整然と理性的に段階移行するための意味のある戦略が、今必要とされている。

私は関心を持つすべての国民に対し、彼らの議員たち、我々を先導する熱意を持つ人たち - 大統領、国会議員のどのレベルであれ - の注意をこの問題に向けさせるよう求める。彼らを義務不履行のままにさせてはならない。彼らには、もし指導者たらんとするならば、指導する厳粛な責任がある。国民は遊説、集会、タウンミーティングなど、あらゆる機会をとらえて事実を提起し、行動を要求すべきである。

我々は、持続可能なよき未来に備えるという神聖な義務を放棄し、無法で身勝手な利害勢力が我々の運命を乗っ取ることを許してきた。我々はこの狂気を続けるつもりか？

これらの問題に対する解決策はある。しかし、国民と我々の指導者たちを欺こうとする‘特別利益団体’は、とてつもなく強力で冷酷である。メディアにいるサクラたちは、この主題を無視し、検閲し、愚弄する。また、大勢の偽情報工作の雇われ三文文士たちは、科学者、‘専門家’などを装い、世界に提示される意味のある技術なら何でもたたき壊そうと待ち構えている。だから、課せられた仕事は気が遠くなるほどに困難だ。しかし、無為の結末はあまりにも悲惨で破滅に至る可能性を秘めているために、あらゆる努力により状況を正す必要がある。

この問題を多くの科学者、発明家、エネルギー研究者たちの連携組織と議論した結果、我々が得た結論は、進展のためには数千万ドルの真剣な研究開発努力が必要だということだった。しかし、これは偽りのエネルギー研究といわゆる 2003 年エネルギー法案に米国だけで使われる数百億ドルを考えたら、丸め誤差にすぎない。国民は、このような有望な新エネルギー研究に、少なくとも種となる財政的支援を与えるよう要求すべきである。

環境団体や慈善団体は、現在の最新技術を応用へと進展させ、人類に迫っているエネルギー危機と環境の大変動を解消するために、これらの技術の展望について研究し、支援と資金援助をする必要がある。

何年もの間、先進的な技術は墜落した企業や軍／産業／研究所／情報機関複合体により、丸飲みにされてきた。多くの発明家の勇敢で自己犠牲的努力により、原理の証明へと発展させられたこれらの技術に支援と保護を与えることを、我々は共同で誓約しなければならない。我々の努力が人類の利益となって戻ってくるようにしよう。そして、人類を待ち受けている持続可能なよき未来を確実にするために、あらゆる試練に耐え、あらゆる犠牲を

払い、あらゆる努力をすることを決意しよう。

参考文献：

Scott, Wm. B. To the Stars. Aviation Week and Space Technology/ March 1, 2004
Stipp, D. The Pentagon's Weather Nightmare. Fortune/January 26, 2004
Schwartz, Peter and Doug Randall. An Abrupt Climate Change Scenario and Its Implications for United States Security. October 2003. (report commissioned by the US Dept. of Defense - Available at:
http://www.ems.org/climate/pentagon_climate_change.html#report).

ナショナル・パブリック・ラジオ (NPR) 2004 年 5 月 5 日の Living on Earth の番組中、これらの諸問題についてハーバード大学の地球・惑星科学教授シュラーグ博士がインタビューを受けた。スティーブ・カーウッズの質問に答えて、彼は次のように言及した：

カーウッズ： なぜ今、急激な気候変動に対する疑問にこれらの多くの注目が集まっているのですか？ あなたが私たちに語ったグリーンランドの氷床コア試料は長期間のものですが、気温の大きな変化が起きるのに数十年もかからなかったことを立証しています。それなのに今日、たとえば国防省やハリウッドの人々は、急激な気候変動に対する疑問に突然注目し始めました。どうしてそのようなことが起きているのですか？

シュラーグ： この社会には現在の私たちのエネルギー技術に多大な経済的利害を持つ強力な勢力があり、変化に抵抗しているのだと思います。だから彼らは、このことが単なる学説、つまり気候変動は科学者たちが確信を持っていない単なる学説にすぎない、という考えを広めてきました。そして、この領域における行動を阻止してきました。

スティーブン・M・グリア 医師
2004 年 3 月 26 日
バージニア州アルベマール郡

(訳： 廣瀬 保雄)